

## 風景・大地・歴史の目、一目瞭然

## ●進士五十八先生の講演から

昨22日午後から「みんなで語ろう! 埼玉のみどり」



どりに」春日部地区浦高会の鳥井副会長、春日部ロータリークラブの田村社会奉仕委員長(春日部地区浦高会副会長)と一緒に参加させていただきました。その中で、進士五十八(しんじ いそや)先生【写真①】の基調講演から..

＊

「緑と農、そしてエコロジー ～人間はどのように自然と共生してきたか!～」

今日は、みどりの埼玉づくり県民提案事業の活動報告会ということで、後半では4つの活動報告が行われますが、その前段で「緑と農、そしてエコロジー」というテーマで共生についてお話しします。

## ◆3つの共生の考え方

今回の東日本大震災で、私達は人間が作ったものの脆さ、危うさというものを痛感しました。私は、今回の震災を契機として、人間と自然の関係をしっかりと考え直さなければいけないと思います。そんなことを3月12日の建設通信新聞の「東日本復興」に書かせていただきました。

今、復興が進んでいない理由の一つに、瓦礫処理の問題があります。瓦礫の処理をするために、国は全国の自治体に依頼したり、分別して処理するという平時の対応を考えていますが、私とかつて関東大震災の瓦礫を埋め立てた横浜の山下公園のように、その地域の土地に埋め立てることを考えるべきと主張しています。原発周辺については、土地を買い上げ国有地化してその土地に汚染土などを埋設して、覆土して植林することを提案しています。住民の方々に対する生涯所得補償などもきちんと国が責任をもってやるという姿勢を示すことも必要です。こうした処理方針を早く決めなければならないと思っています。そんな内容については、お手元の新聞を読んでいただきたいと思います。

さて、話を「共生」に戻しましょう。共生には3つの考え方があります。

1. 「自然共生」です。これは生物的自然との共生です。
2. 「環境共生」です。これは、資源・エネルギーなどとの共生です。今回の東日本大震災では、このエネルギーとの共生の問題がクローズアップされました。
3. 「地域共生」です。これは、先進国と発展途上国、都市と農村などの地域間の共生を意味します。こうした3つの共生について、考えていかなければいけないと思います。

＊ ＊

## ◆環境の主流化

現代社会は、政治、経済、都市活動、企業活動のいずれもが環境と向き合っていかなければならないということです。これを「環境の主流化」と呼び、「生物多様性の主流化」とも言えます。

＊ ＊

## ◆緑の分類(小自然、中自然、大自然)

ここからは、いろいろなスライドになりますが、最初はH・ドレイフィスの人間の生きられる領域についてのスライドです。地球スケールで考えると、土壌では18cm、水では11cmなどと非常に狭いことが分かります。

次に土地利用における緑を考えると、森林、叢林、草原、農耕地が整然と区分されるよりも、それぞれが入り込んで多様化しているほうが、生物生息環境が良いという結果がでています。緑の効用ということでは、グリーンコンタクトという言葉があります。人間生活は緑とは切っても切れない関係にあるということです。

次に自然は、「小自然、中自然、大自然」と分けて考えることができます。この中で、小自然は木、中自然は林、大自然は森と捉えることができます。そして、自然にはいろいろとあることを認めることが大切です。その中で、大自然は野生的な自然であり、小自然と中自然は人間が介在しなければ維持できないものです。

私は、屋上緑化も含めて、都市の自然面率を上げようと言っています。鳥や虫たちは、ここが行政の管理する公園、ここは民有地の屋上庭園などという区別はしません。ですから、鳥瞰的に見たときに緑が広がっているような都市が必要です。緑の自然面率は50%が必要だと考えています。

「Green(グリーン)」はアーリアン後の「Ghra(グラ、生長する)」からきています。日本の「緑」にも、新鮮で生長する意味合いが含まれています。

その根底には、この地球上で唯一の生産反応であり、かつ生命を育む源泉は、植物の葉緑体における光合成であることを生き物の直感でしていたこと、があるのではないのでしょうか。

大都市といえども、農地や緑地と共生すべきと考え

ボストン・エメラルド・ネックレス計画図  
(1894年)



えます。その代表例がボストンの「エメラルド・ネックレス」でしょうか。【写真②:エメラルド・ネックレス】

\* \*

#### ◆背山臨水(はいざんりんすい)

三富新田では、暴風林を「山」と呼びます。これは、「背山臨水」の思想からくるもので、後ろに山を配し、前に池や川に臨むのが、地勢・地相から尊ばれました。中国から伝来した風水なのですが、平城京でも、平安京でも取り入れられました。

また、明治神宮の森では、樹木の多様性と多層性により、公園が計画され100年でうっそうとした森が造られました。美しい空間は生命あふれる空間であるともいえます。

\* \*

#### ◆都市のエコ

今、「エコ」という文字が付くと、国では何でも予算化されるという感じですが、各技術者がいろいろと都市にエコだといって投資するため、実際はエコでなくなっているといえましょう。都市のエコで大切なのは3つです。公共事業で大切なことは、建築は省エネ建築を目指し、道路は浸透性舗装を徹底して水を土壤に返し、そして緑化することです。

\* \*

#### ◆農民的に生きる

皆さんに農業をやりなさいとは言いませんが、農民的な生活を…と言いたい。農民的な生活とは、農民は自然と共生するためにたくさんの知恵を持ち、本物を知って生きていました。そんな生活を都市住民も大切にできるようなまちづくりが必要なのです。

\* \*

#### ◆一目瞭然とは、風景の目、大地の目、歴史の目

緑化の大切さを話してまいりましたが、私はトータル・ランドスケープが大切だと思っています。これは、アメニティでもあります。アメニティとは、アモール(愛)ある環境であり、地域らしさ、その土地らしい風景づくりと言えます。地域の風景を大切にし、全体でものを見ることが大切です。

一目瞭然とは、風景の目、大地の目、歴史の目を持って地域を見て行くことであります。地域固有の

資源に光を当て、そこに意味づけを行い、そして名前をつけて大切にしていくことで、風景デザインが完成します。中国に「西湖十景」「瀟湘八景」とい



う景勝地がありますが、杭州市の西湖はその昔、詩人の白楽天、蘇東坡が長官として派遣され、洪水対策のために湖底の浚渫に合わせて周りの修景を行い、現

代に引き継ぎました。昨年、世界文化遺産に指定され、年間5千万人の観光客が訪れています。【写真③④:西湖十景】



\*

◆進士五十八(しんじ いそや、1944年 - )は日本の造園学者、農学者、元・東京農業大学地域環境科学部造園科学科教授。同大学第10代学長(1999 - 2005年)。現・同大学名誉教授。農学博士。造園学・環境計画学・景観政策学を専門としている。

\*

さて、進士先生のご講演、私にとって何度目かは忘れましたが、心に響きましたねえ。特に、「農民的に生きる」という言葉には共感しました。

明日は「浦高百年の森づくり・間伐」です。私たち



の活動も平成17年10月の記念植樹以来、19回目になると思いますが、荒川源流の地に5ヘクタールの山をお借りして、そこで生物多様性に沿った植林を続けています、夏には下草刈り、秋には間伐、春には捕植などを繰り返しながら今

日に至りました【写真⑤:浦高百年の森HPより】。

そして、この活動を続けるために約5千万円以上の寄付を同窓生から募りながら今日に至りました。そして、毎回100人近い同窓生が集まり、森の手入れを続けています。私たちの代のためではなく、孫、さらにその子達のためにこの森を育てていく覚悟です。それは、とても楽しい活動です。(o)